

カフカから読む「孤独／孤立」

～異様さの相反性と『変身』～

シンキング・バーズ
歴史科学研究班

演技を求める「社会」 ギャップを感じる「個人」

人々が不気味に感じる存在は、この世界にはいくつもあります。一般的には不安や恐怖を感じる存在で、ヒト自身に限らず、ヒトを襲う動物、害をもたらす昆虫や細菌、また、害はなくとも気味悪く感じる生き物など、ヒトは、さまざまな存在に不安や恐怖を感じながら生きています。

ところが、その不気味な存在から見たヒトの姿は、ヒト自身では感知できない異様な形態だったりします。ヒトは、いわゆる社会的通念として、大半の人々が共有していると認識している一般性 (generality) を根拠に、ある存在の不気味さを申し立てたりします。しかし、そのヒトの姿や言動が逆に、異様に見えたりすることがあるのです。ヒトが共有している一般性の方が実は異様で、ヒトが不気味とみなす存在は、実は何の危害も加えず、そこにいるだけという光景だったりするからです。

不気味さは、目線がちがうと逆立する相反性 (contrariety) を持っていることとなります。哲学の分野では、仮面を剥いだような姿に、「実存 (real existence)」という概念を使ったりします。ある意味では、「実存」同士の相克が、ヒトの「社会 (society)」の実相なのかもしれません。

●『変身』への眼差し

フ ランツ・カフカ
(Franz Kafka
1883 - 1924) が、
その代表的な小説『変身



(*Die Verwandlung*)』を発表したのは、1915年のことです。ヨーロッパでは、第一次世界大戦 (1914 - 18) が勃発し、各地に戦火が及んでいた頃です。カフカが暮らしていたプラハ (Praha) は、その当時はオーストリア＝ハンガリー帝国 (Österreich-Ungarn 1867 - 1918) 領内の一都市でした。スラブ (Slavs) 系の居住人口が多く、独立運動の火種を抱えていました。戦火は及ばなかったものの、不穏な情勢だったことは否めません。カフカは、統治するドイツ人や独立を目指すスラブ人には属さないユダヤ人で、異化されがちな境遇でした。

『変身』は、多くの方がご承知のように、主人公がある朝突然、毒虫に姿を変えてしまったという怪奇譚です。ボクが初めて『変身』を読んだのは、たぶん高校生の頃だったと思います。その時の読後感の記憶は、ほとんど残っていません。たぶん不気味な物語のような認識だったのでしょうか。

朝目覚めた時、学校や職場に行くのが鬱陶しく、ベッドでヌクヌクしていたと思う経験は、恐らく誰にでもあることです。家族の朝食づくりを課せられた鬱陶しさから、同じ経験をすることもあり得ます。家族が呼んでも起き出したくなく、いつまでも枕にしがみついているような経験です。

※参考にさせて頂いた文献) マックス・ブロード編、川村二郎・円子修平訳『決定版カフカ全集1』(1982年3月、新潮社)、村川堅太郎・江上波夫ほか編『世界史小辞典』(1972年12月、山川出版社)

幼少期に「早く起きないと、毒虫になるよ！」とたしなめられたりすると、その記憶が呼び覚まされ、ベッドでぼんやりと、「ボクは毒虫だ」と思ったりするかもしれません。

『変身』の主人公グレーゴル・ザムザは、セールスマンの職にあります。いくつかの職を経て、その仕事に就きました。家族は、両親と妹の4人暮らし、父が事業に失敗して借金を抱えたため、グレーゴルの収入が家計の支えでした。その仕事に対してグレーゴルは、苦痛はないものの、それなりの不満があり、借金を完済できたら会社を辞めたいと思いつながり働いていました。本音と建前に、一定のズレがある働き方です。家計を支える義務感が先行して、相応にストレスを抱えた状態だったと言えます。現代社会では、誰にでも起こり得る状態です。ある日突然、入社拒否の衝動に駆られても、不思議はない境遇だったと言えます。

その主人公グレーゴルは、ある朝目覚めると、意識はヒトのまま、姿を毒虫に変えていました。起き出して来ないグレーゴルを気に掛けた家族や会社の役員は、その部屋に押し掛けますが、一匹の毒虫を発見し、驚愕します。会社役員は早々に引き返し、不気味だった父はグレーゴルを杖で殴打、母は悲鳴を上げて逃げてしまいます。妹だけは食事を部屋に届けてくれるのですが、姿を見せると逃げてしまうのです。グレーゴルは部屋で孤立し、その孤立者の心情と家族の対応を綴った作品が『変身』です。

● 「孤独／孤立」を生む社会

ク イツ人とスラブ人の狭間で孤立しがちなユダヤ人という境遇にあり、家庭内では父親との確執から孤独癖があったとされるカフカは、孤独な人生を歩んだ作家だったことは否めません。理解者が少なく、その心情を作品に

投影することで、理解者を求めたという側面があったと推測することは可能です。

「孤独」の問題は、近現代社会の進展と共に、社会問題として取り上げられるケースが増えています。日本では、「引きこもり」「不登校」「一人暮らし世帯」などのことばがたびたび使われ、その対策が求められています。そこに至る要因は異なるとはいえ、社会的関係の齟齬が生んだ現象で、年齢や性別に関わりなく発生しています。

『変身』の主人公グレーゴルの社会的関係は、家庭では収入の担い手です。会社では、セールスマンという職業柄、あちこちに出向いて顧客と交渉し、顧客を不快にさせる言動は避けることが望ましい立場で働いています。グレーゴルは、家庭と職場の両面で、ある種の演技者を生きる境遇にいたと言えます。社会的関係が生んだ役割を、「自己」を封印して演じるような境遇です。そこでは、「本来の自己 (natural oneself)」なるものはさほど重要ではなく、役割を果たす存在が重視されます。「自己」の感情や願望より、役割を果たす存在でいることが、関係者を満足させるのです。現代社会では、夫や妻の役割、父や母の役割、仕事上の役割など、あらゆることが関連して来ます。

もちろん、役割を果たす存在と「自己」との間に、ギャップが少なければ、社会的関係に亀裂は生じにくいと言えます。しかし、ギャップが拡大し、本音と建前の両刀使いに苦痛が伴うようになると、問題が表面化することがあります。望まないことを無理強いされたり、暴力的な言動などで「自己」を強く否定される経験をしたりとすると、ギャップ意識が拡大すると考えられます。

その場合、精神医学の視点から見れば、当事者は治療の対象となります。半面、社会科学の視点から見れば、暗黙のうちにヒトに役割を強いる社会構造の問題になって

来ます。冒頭で述べたように、当事者と取り巻きの関係で、どちら側が異様さ(瑕疵)の割合が高いのかという議論になると言えます。問題があるのは、当事者側か、社会の側か、です。かつては、当事者側に責任を負わせる傾向が強かったのですが、「孤独／孤立」の出現頻度が高まるにつれ、社会の問題として考える必要性が増しています。

●社会が毒虫を襲う時

ヒトの心理状態は、そのヒト自身の遺伝的資質や体調などの個人的要因と、生活環境や対人関係などの社会的な環境要因によって左右されます。いわゆる先天的要因と後天的要因です。「孤独／孤立」を社会の側から見ることは、後天的要因について考えることです。

ヒトの心理に影響する後天的な環境要因は、誕生後からの家庭環境、成長過程の転居を含む地域環境、学校での対人関係やその教育環境、職場での対人関係や業務環境、老後の生活環境など、多岐にわたります。個別に異なる環境が、個人的な資質に作用するため、心理形態が同じではありません。しかし、ヒトが「孤独／孤立」に至るのは、社会的関係で何らかの強い心理的圧迫(ストレス)を受けるか、学習プログラムや時代的な技術の進展などからドロップ・アウトしたかが、主な要因と考えられます。

前者は、「虐待」「いじめ」「ハラスメント」などが挙げられます。モラルの劣化や社会的習慣の悪弊(「しつけ」と称する体罰、学校における生徒間や教師からの暴言や暴行、職場での長時間労働や性交渉の強要など)によるものです。その改善には、言語習慣を含むモラルの見直しが必要になります。

後者は、個人的な資質と社会的要請とのミスマッチ、学習能力や身体能力の低下などによる社会環境とのギャップが挙げられ

ます。学校の授業内容について行けない、望まないながら生活維持のために仕事をしている、高齢に伴う身体能力の低下で活動範囲が縮小した、学習能力の低下で電子機器等を使う生活について行けないなどが考えられます。その改善は、ことばで「ミスマッチやギャップの幅を縮小する社会環境プログラムの整備」と言うのは簡単です。しかし、その内実は、社会的要素の底上げ(レベルアップ)と底下げ(レベルダウン)の二面性を持ち、困難な課題と言えます。

『変身』の結末が悲哀に満ちていることは、多くの方がご承知のとおりです。一家の生活が立ち行かなくなったことで、残された家族三人は働きに出て、部屋の間貸しまで始めます。そうした中、グレーゴルは父の激昂で二度目の攻撃にさらされ、瀕死の状態になります。そして、最愛の妹が「このおばけに面と向かって、お兄さんの名前を口にすると、もう御免です」と言い放ち、兄の命を絶つのです。毒虫から解放された家族は、大人に成長した妹と共に、新たな生活へと踏み出して行きます。

『変身』は、毒虫として異端視された存在が、家族に虐待され、死に至る物語です。毒虫という主人公の自己認識は自虐的で、「自分などいない方が良い存在」と思い込むような、ある面では精神疾患的な状態を連想させます。現実問題として、そのような追い込み方で幼児や高齢者に虐待を繰り返したり、追い込まれた側が自ら命を絶つ事件が、日本でも数多く報告されています。

ある近代システムが求める役割に、個人が対応できる範囲は限られています。その対応力を失ったヒトを近代システムは、容易に虫けらにする可能性があります。『変身』は、自虐的な自意識を通して、その現実の姿を告発しているのかもしれませんが。

(2020年3月8日)

シンキング・バース新書

近代文明への問い
カフカから読む「孤独／孤立」

2020年3月9日（初版）発行

著者：シンキング・バース
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。